

森田草平

松山と熊本巡礼記

松山と熊本巡礼記（上）

「坊っちゃん」があゝの時代の日本の中学と中学の教師を描いたもので、特定の松山中学校を写したものでないことは云う迄もない。つまり田舎の中学の類型を描いたものだ。しかし松山中学を克明に描出して、その個性を發揮することが、同時にあゝの時代の中学の類型をいよいよ明確にする所以でもある。従つて漱石先生が「坊っちゃん」を書かれる際、始終松山中学を目の前に置いていられたことは毫末も疑いを容れない。「草枕」と熊本に

近い小天温泉との関係に於ても、その理想化の程度に差はあろうが、やはり同じ事が云われよう。その意味に於て、私がこの秋「漱石先生言行録」の材料蒐集を名として、この両地を訪れ、親しく先生の筆の跡を後附けることが出来たのは、私にとっては何とも云われぬ幸福であつた。尤も、松山や熊本は、この月報やその他の著述でも毎々紹介されて、別段珍らしいことではないのである。が、私はわざわざ出掛けて、自分の目で親しくそれを見て来た。その「親しく見て来た」と言う所に、私の喜びがある。その喜びをお頒ちしたい。

昭和十一年十月二十九日の夜行で東京駅発。大阪をその翌々三十一日の午後二時の汽船で立ったから、伊予の高浜へ着いたのは、十一月一日の午前三時頃であった。坊っちゃんに着いたのは真昼間であつたらしい。日が強いので水がやに光る上に、汽笛の音を聞いて、赤ふんどしを締めた船頭が舳を漕ぎ寄せて来たとある。私の着いたのは真夜半まよなかで、大阪商船の汽船は棧橋へ横附けになるようになつていたので、そんな光景は見られなかつた。一緒に降りたのは男女合せて五六人、汽船の待合所を出ると、すぐに道後行のバスが待合せていた。松山までは

二里余り、乗車賃は五十銭。この間は「坊っちゃん」にもある通り汽車も通っている。私は戻りにその汽車に乗って見たが、「ごろごろと五分許り動いたと思つたら、もう降りなければなら」ない程近くはない。あれは大袈裟な物の云い方をする江戸っ子の癖である。「マツチ箱のような汽車」でもなかった。これは時代の変化である。う。ところで、行きのバスは、皆目知らぬ土地で、夜半^{よなか}の風も肌に沁みるし、小山の裾や松並木の間を通過して、悠に小一時間はかかったような気がした。乗合いの男女はいずれも途中で降りて、松山市内の指定された城戸屋

の門前で卸された時は、私の外に道後行きの洋服の紳士が一人乗っているばかりであつた。

城戸屋は「坊っちゃん」の中の所謂山城屋である。宿屋だから門は明け放しになつていたが、大戸は卸して、家中うちじゆうが寝鎮しづつていた。私は鞆たもとを石畳の上に卸して、呼鈴かづはと見廻してみたが、急には見附みつけからない。どんどん戸を敲たたいた。恐らく四五遍は敲たたいたろう。すると、玄関脇げんかんわきの部屋で寝惚ねぼけたような男の聲がして、六十近い爺おやさんが格子戸の間から顔を出した。が、迂散うさん臭くさそうな様子をして、なかなか戸を開けてくれない。三時に高浜へ着

く汽船があるのだから、今頃宿へ着く客もたまにないとは云われまい。はて面妖なと思つたが、喧嘩にもならない。そうこうしている間に、奥からばたばたと足音がして誰やら駈け出して来たかと思うと、いきなり大戸を開けて、二十七八の年増の女中が、寝巻の上に毛糸のショールを引掛けたまま、睡そうな眼をして出て来た。そして、

「東京の森田さんですか」と訊いてくれた。

これで私もほつとした。かねて村上霽月大人からその旨を伝えて置いて貰ったので、私の来ることは二週間も

前から宿には分っていたのである。

すぐに二階の所謂「坊っちゃん」の間へ通された。が、私は汽船の中で一睡もしなかつたから、床を延べて貰つて、そのまま横になった。目を覚めたのは九時頃、「お湯が沸いていますから」と云われるので、早速風呂に浸つた。風呂場は廊下を幾曲りもした、本館の裏手の方にあつた。「坊っちゃん」の間は旧館の二階、表の玄関からは右寄りの所にあつて、正面の本館はその後建直したものだと言聞いた。この外に裏の方には、庭を距てて平家ひらやの座敷が幾棟もつづいていた。なかなか広い家だ。が、

或時期の外には泊客も滅多にないらしく、夜間よるなぞ裏座敷の方には灯も点かないので、一寸凄いい位に森閑としていた。

私は湯から上って、初めて自分の泊っている部屋をゆつくりと点検して見た。階段を上った入口に、「夏目漱石先生『坊ちゃん』の間」と云ったような扁額が麗々しく懸けてあるのには、一寸微笑まれましたが、別に悪い気持ちでもない。坊っちゃんちゃんは初め階子段の下の暗い、蒸暑い部屋へ入れられたが、お茶代を五円奮発したら、表二階の大きな床の間の附いた十五畳の座敷へ取代えら

れたとある。が、この座敷は十五畳ではない、十畳に五畳の次の間が附いているだけだ。床の間も普通のもので、違棚、地袋も附いてはいるが、古い建物だから天井は割方低い。それに柱も天井も時代が附いて、古色蒼然たるものがある。今となつては、とても思い切つて茶代を奮発するような、気を起させる部屋ではない。その点私なぞには一番気楽だ。見ると、何時の間に懸け代えたのか、床の間にはちゃんと先生の軸が懸っている。私は何だか故郷へでも帰つたような気がして、伸び伸びと、すっかり寛いでしまった。

昨夜の女中さんが朝飯の給仕をしてくれた。「東京から来た」と聞いて、「東京はよい所で御座いましょう」と云う程、間の抜けた女中さんではなかった。これも時代の変化である。唯楽しみにして来た伊予言葉を余りに使ってくれないのは、一寸物足りなかった。私は伊予言葉というよりも、「坊っちゃん」の中の「ぞなもし」言葉が好きだ。一つは伊予の方言が私の生国美濃の方言と似ているからでもある。処で、この女中さんが床の間の軸を指さして、「あれがどうも読めませんが、先生に伺ったら分るだろうと思っていました。一つ読んで下さり

ませ」と云われたのには弱った。二句目の「吟懐輿道新」の吟の字が妙な書体になっていて、私には何うしても読みこなせないのだ。これにはすっかり赤面してしまった。今全集について調べた所を掲げて置く。

樹下開襟坐 吟懐餘道新

落花人不識 啼鳥自殘春

この軸は、勿論、宿の主人が後から買入れたもので、「坊っちゃん」とも、松山時代の先生とも関係はない。一体、この部屋が「坊っちゃんの座敷」だという事も、今は故人となられた俳人大嶋梅屋氏が、その昔先生と散歩

してゐる間に、城戸屋の前を通つて、「あれが僕の初め
て松山へ来た時に泊つた部屋だよ」と指ざされたのを記
憶していられたのに基づく^と聞く。それは恐らく間違ひ
はなからう。が、最初階子段の下の蒸暑い部屋へ入れら
れたと云うのは、あり得ないことではないとしても、何
うか知らとも考えられる。しかもそれが松山では一般に
信じられて見ると見え、先年松岡讓君が未亡人と一緒に
同地へ遊ばれた時には、禿茶鬢はげちやびんの番頭が出て来て、「何時いつ
ぞやは先生をひどい部屋へお通し申して」と、主人の代
も変れば、番頭も代つてゐるのに、我が事のように謝罪あやま

っていたそうなの。そんな番頭は今度はもう出て来なかった。

その日の午後から私は森河北氏の案内で、まず、先生が松山時代に寄宿していられたという二番町の上野氏の離座敷はなれを訪ねて見た。この家のことは久保より江さんの話にも出ていたから、私が改めて紹介する迄もあるまい。が、親しく見るということは、又別な感じのするものである。何よりも私はその家が四十年の歳月を経て、よく保存されているのに驚いた。今は塀で仕切られて、別々の住宅すまいになってはいるが、母家おもやの上野氏の宅も元の儘だ

ということであつた。私は挨拶も忘れて、ぼんやり二軒の家を見較べていた。それから現在住つてる方の許可ゆるしを願つて、その昔子規居士が松山の俳人を集めて、毎晩句会を開いたという階下したの座敷から、先生が書齋にしていられたという二階の部屋まで、一々見て廻つた。その部屋いへの窓から庭の古い柿の樹が見える。庭の木石のたたずまいも一寸趣きがある。一体にこの離座敷はなれ自体がその時分としては小意氣に出来上つているのだ。先生も定めて氣に入つていたろうと思われる。

その家を出た時、私は森さんに向つて、「あの家を何

か公共団体の手で保存する議はないか。子規居士、漱石先生の遺跡として、松山の名所の一つになるではないか」といような意味のことを話した。森さんは「そう云う議もあるが、何分にも現在の持主が手放したからないの
で困る。しかし今の儘で取潰すようなことはしない、又もし他へ譲る場合には、まずこちらへ話して貰う約束になっ
ている」と云われた。それならまず安心である。

例の「いか銀」の家は久松家の邸内になって、疾うに取
払われたから、今はもう見られないとのこと。で、今度は先生
がよく散歩されたという石手川の土手をドライ

ブして、岩偃の景勝を一覧した上、更に石手寺へ廻って、
国宝の三重塔、鐘楼、仁王門などを見た。四国霊場五十
一番の札所だということだが、私が松山を好きになった
のは、実はここを見てからである。空気は明澄で、山の
緑は濃く、門前を流れている小川の水は、手で掬して呑
みたくなる程清冽だ。老後を隠居するなら、こんな所だ
なとつくづく思った。それから直ぐに道後の温泉へ出た。
道後の湯は、極めて古い歴史を持つてようだが、湧出
量が少ないためか、七十何軒の旅館はあっても、内湯と
いうものがない。町の人も泊客とまりきやくも手拭をぶら下げて、

いずれも三軒ある元湯へ入りに行くのである。「坊っちゃん」を見ると、温泉場の名が住田——これが当時の校長さんの本姓であるそう——となっていて、「城下から汽車だと十分許り、歩^{ある}行いて三十分で行かれる」とある。正にその通りだ。それから「温泉は三階の新築で上等は浴衣をかして、流しをつけて八銭で済む」とある。実はこれが松山へ行って見るまで、私にはよく分らなかつたのだ。いずれ坊っちゃんが入られたのは公衆浴場で、内湯の外にそんなものがあるだろう位に見当は付けていた。が、行って見ると、内湯なぞでんでない、公衆浴場

が唯一の温泉である。成程、これなら坊ちゃんが毎日出かける気になるのも尤もだと思った。実際三階建の堂々たる木造建築——但しもう新しくはない——で、一階は入浴料五銭、普通の銭湯と同じ事である。二階は二十銭、浴衣を貸した上に、茶菓を出して、いくらでも休息することが出来るようになっていた。但し入れ込みだ。三階はそれが別々の部屋になっていて、入浴料は一人前三十銭、四十年間に四倍弱の値上げはまず相当の所であろう。但し一階の客も、二階の客も、一様に階下の湯へ入るのは、平民的で至極気易い。「湯壺は花崗岩を畳み上げて、

十五畳敷位の広さに仕切つてある」というのも、その通りであつたが、私達の入つたのは日暮れ前のせいか、浴客が立て込んでいて、とても「湯の中で泳ぎ巡る」わけには行かなかつた。それ処か、正面の聖徳太子の石像の下から新しい湯が滾々と流れ出しているが、そこへ廻るのは順番でなければ行かない。汽車の出札所か映画館の前のように、裸体で行列を作っているのは一寸可笑しかつた。

湯から上ると「坊っちゃん」にもあるように、「女が天目へ茶を載せて出」してくれた。鷺の形をした塩釜

(?) が二つばかり添えてある。森さんの計いで、私はここで名物の団子を取寄せて見た。紅、緑といろんな色の餡子あんこを附けた団子が三つずつ串に刺してある。喰って見ると、なかなか旨味うまい。但し昔はこんな色は付けてなかつたそうだ。

「団子屋は遊廓の入口にある」と本文にあるが、団子は温泉で喰ってしまったから、その遊廓へも公園へも行って見たかつた。それでも戻りの自動車の中で、山嵐が赤シャツを襲撃するため、八日間隠れていたという枡屋は何どの辺にあるかと訊いて見た。森さんは「この家が

そうだという話」だと云うので、わざわざ車を留めて見せてくれられたが、三階建ての真新しい家で、どうも私
が想像に描いていたそれとは大分懸け離れていた。穿鑿せんさく
好きな松山人も、未だそこ迄は突留めていないらしい。
一路宿へ向って急ぐ。

明くる日は午前中、やはり森さんの案内で、先生の旧
知だという近藤元晋氏を訪ねてから、正宗寺境内の子規
堂を見て、子規居士及び鳴雪翁の墓に詣った。それから
村上霽月大人と商業会議所会頭山本義晴氏の斡旋に據る
料亭亀の井の座談会に出席した。集るもの右の両氏を始

めとして、三好森太郎、新野良隆、北尾桂二郎、森河北の諸氏、いずれも松山時代夏目先生の薫陶を受けたか、もしくは子規居士の句会に出入した人々ばかりで、日のたそがるる迄盡きせぬ当時の追憶に耽った。その記事はいずれ月報に掲載するつもりだから、ここには略して置く。

夕方宿へ戻ったが、私は酒を飲みながら談話の要点を筆記したこととて、すっかり労れていた。が、松山も今宵限りと思うから、勇を鼓して市中の散歩に出た。が、城山は夜間だから登れないし、中学は郊外へ移転した。

行つて見れば、まあ「天麩羅四杯は過ぎるぞなもし」の蕎麦屋位のものだが、満腹でとても敵わないから断念した。目貫の大通りをぶらついてから練兵場の方へ足を向けたが、暗いので、これも途中から引返した。日本銀行支店の近代的な建物が目に着く。城戸屋は何処かと訊こうと思つてる間に、ひよいとその前へ出ていた。「広い様でも狭いものだ」、「二十五万石の城下だつて高の知れたものだ」と、坊っちゃんの威張った言葉が微笑ましく想い出される。

明くる朝は、早く起きて城山へ登るつもりでいたが、

寝坊をして、別府行の汽船に間に合わぬと云われたから、これも断念して汽車に乗る。汽船は午前九時高浜発であった。これを要するに、松山は好い所だ。先生が何ういう所^{わけ}因で松山へ来て、何ういう所因で松山を去られたか、私にはよく分らない。が、思うにそれは個人的の都合で、決して松山の人や気候風土が気に入らなかつたためではあるまい。清は手紙で、「田舎者は人が悪いそうだ」の、「気候だつて東京より不順に極まつてる」なぞと云つてゐるが、あれは「箱根の先」は狸ばかり住んでるようになら考えてる人間だから、決して当てにはならない。

日本文学電子図書館

松山と熊本巡礼記 (上)

著 者：森田草平

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館